

■ 資 料

高蔵寺ニュータウンの人口の地域差

小 池 秀 夫

目 次

1. はじめに
 2. 高蔵寺ニュータウンの概況
 3. 本稿でのニュータウン地域の範囲
 4. 人口動向の地域差
 5. 人口の分布
 6. 少子高齢化
 7. 国調人口と住民登録人口の乖離
 8. 近年の人口の動き
 9. おわりに
- 参考文献

▶ 要 旨

全国の人口減少や少子高齢化の中で、かつて人口急増地域であった大都市近郊の大規模住宅団地において、それらの急速な進行が注目される。中部圏最大かつ最初の高蔵寺ニュータウンを取り上げ、地域スケールを意識した分析を行う。具体的には町丁別比較を通じて周辺地域との違いやニュータウン内の地域差をみる。人口現象は地域によって多様に現れていることを確認したい。

▶ キーワード

高蔵寺ニュータウン, 人口減少, 少子高齢化, 地域スケール, 地域差

1. はじめに

直近の国勢調査（以下、国調とする）結果は、日本の地域人口が新たな段階に入ったことを示している。2000－2005年の全国の人口増加率はプラスとなったものの、初めて1%を割った。0.7%という数字はその前の5年間に比べて、約半分の縮小となる。しかも、人口が減少した都道府県数は32に達し、これまで最多の26（1955－1960年）を大きく上回った。2%以上もの減少は1995－2000年には秋田県のみであったが、今回は9県に達した。さらに、今回の国調人口を2004年推計人口と比べると、1万9千人減となり、人口減少時代に入ったことになる。総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）も19.5%に上昇した。5年毎の上昇幅は1990年から引き続き2ポイント台を示した。

これらの状況は周知のことであるが、ここでは、今年入居開始40周年を迎えた高蔵寺ニュータウン（以下、ニュータウン）について、小地域統計を用いた地域差を示したい。このスケールとしては500mメッシュによるデータもあるが、ここでは町丁別統計を使用する。

春日井市役所はこれらのスケールでの人口統計を公表しているが、単年の数字のみである。変化や構成比（増加率、高齢化率など）の表示も乏しい。同時に、数字はあるが、分析はされていない。本稿はそれを補うことにもなるが、なによりも住民にとって関心のある、より身近な人口状況（ニュータウンではどこでも人口が減少し、少子高齢化が進んでいるのか、自分が住んでいる町丁の人口と変化など）を取り上げる。周辺地域も視野に入れて、人口の地域差と特徴を明らかにしたい。

2. 高蔵寺ニュータウンの概況

高度経済成長期、急増する大都市人口や核家族化などによる住宅需要の受け皿として、「ニュータウン」という大規模住宅開発が多数計画された。東海地方では豊田、四日市など5候補地区が検討された。その結果、地形（緩やかな丘陵地）、土地所有（国や県）、鉄道複線化中、愛知用水工事中などの理由から、春日井市高蔵寺地区が選ばれた。ここに、当時の日本住宅公団が初めて手がけた「高蔵寺ニュータウン」が誕生することになる。名古屋市の北に隣接する春日井市の北東部、JR（当時は国鉄）高蔵寺駅北方の丘陵地に造成された。

最初にできたのは、ニュータウンの西端近くに位置する藤山台団地である。今から40年前の1968年5月18日、5階建公団賃貸集合住宅への入居が始まった（第1次727戸）。その他の地区でもすでに僅かの戸建住宅がみられたが、集合住宅に限れば、岩成台団地賃貸住宅が2番目である。1971年3月に第1次831戸の入居があった。3番目の高森台団地賃貸住宅は1973年3月からであるが、戸建住宅については前年までに179戸が建築されていた。ニュータウン全体の集合住宅の多くは公団住宅によって占められるが、高森台には1973年県営住宅、翌年公社住宅も建てられた。

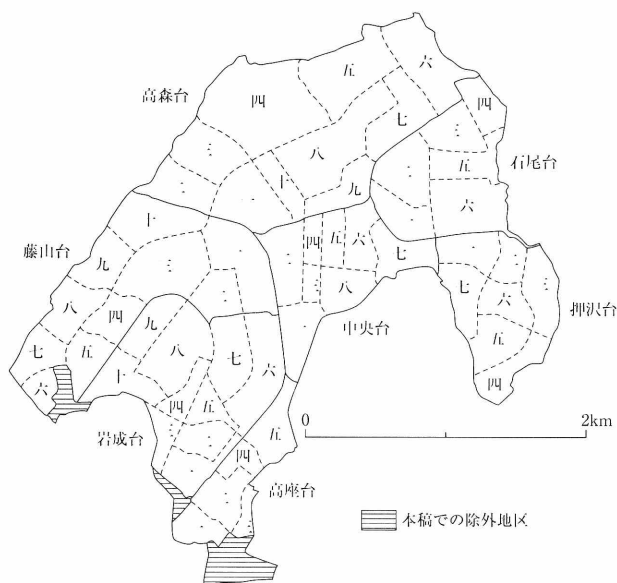
中央台は1974年7月の賃貸住宅（476戸）と分譲住宅（220戸）に始まる。ここには東部市民センター、郵便局、ショッピングセンター、スポーツセンターなどがあり、位置的にも、機能的にもニュータウンの中心となっている。ニュータウンの玄関口に位置し、ランドマークともなっている高座台の集合住宅（9～11階建5棟、439戸）への入居は1978年から始まる。石尾台の戸建住宅建築は1973年に始まったが、特徴的なタウン石尾台への入居は1980年である。最後に開発されたのが押沢台である。集合住宅は少なく、戸建住宅建築は1978年からである。

これらの開発に伴い、学校もニュータウンだけで小学校10校、中学校4校となっている。当初計画よりはともに2校少ない。高校も3校予定されたが、愛知県立高蔵寺高校が藤山台1丁目にあるのみである。

3. 本稿でのニュータウン地域の範囲

人口について述べる場合、ニュータウンの範囲を明確にしておく必要がある。厳密に言えば、その範囲はニュータウン開発との関係で区画整理事業が行われたところである。そこには上記7地区のほか、次の地区も含まれる。すなわち①高蔵寺町北の5つの丁のうち、3丁目の全域と4丁目の一部、②白山町9丁目全域と1丁目・8丁目の一部、である。しかし、たとえば高蔵寺町北3丁目の、2005年国調人口は358人（同時点の住民基本台帳に基づく人口に外国人口を加えた数一以下、登録人口とする一347人）であるが、4丁目の499人（537人）のうちニュータウン地域部分の人口は把握が困難である。後者には「ニュータウン」という名のパチンコ店や15階建マンションもある。白山町9丁目のほとんどは北にある神社と南の寺院で占められ、人口は、8丁目と合算されており不明（4人）である。8丁目には戸建住宅、1丁目にはUR都市機構の賃貸住宅（2棟、37戸）もあるが、ニュータウン部分の人口は不明である。このため、本稿でのニュータウンの範囲にはこれらを含めない（第1図）。藤山台など、「台」のつく7地区のみを対象とする。それは一般的なイメージに近い範囲でもある。

ニュータウンと除外地域の間には居住環境や住民意識の違いもある。春日井市と中部大学によるアンケート調査はニュータウンと高蔵寺町北の間の差を浮き彫りにしている。2、3の例を挙げよう。住環境評価で類似した点もみられるが、「住宅周辺の静けさ」には大きな差がある。「満足」の比率は、ニュータウンで最も低い藤山台でも25.0%（最高は石尾台の53.4%）を示すのに対して、後者は7.1%に留まる。「ニュータウンのめざす姿」でも、「住宅を中心とした落ち着いた雰囲気のみち」が16.7%であるのに対して、「商業・業務など多様な都市機能を持つにぎわいのあるまち」は83.3%に達している。ニュータウン7地区の前者の比率はいずれも70%を超え、逆の結果を示す。



第1図 高蔵寺ニュータウンの町丁区分

4. 人口動向の地域差

上記の理由から、厳密な意味でのニュータウンの人口は把握できないことを、まずお断りしたい。

ニュータウン各地区の名称の末尾は「台」であり、「町」とは呼ばないが、ここでは他町と比較する場合は町とする。開発の順に西の藤山台から東の押沢台まで7つの町が存在する。

7町の人口を5年毎の国調でみてみよう。1970年のニュータウン人口が9,843人と報告されているが、当時は藤山台しかなかった。1968年5月18日に入居が始まり、2年後の10月1日には1万人近くに達していたことになる。1975年の報告でも、ニュータウンに関しては町名ではなく、小学校区単位となる。藤山台3校区（東、西を含む）の人口は合わせて14,297人、岩成台2校区（西を含む）が5,236人、高森台2校区（東を含む）は7,772人、そして中央台小学校区2,263人、石尾台小学校区172人となっている。当時まだ開校されていない3校区の人口が示されているが、開校が遅れたことを物語っている。高座台を例外として、各町には1～3の小学校があるが、学区と町域は一致しない。したがって、1980年からの変化をみることにする。

この年以降の人口推移において、ピークに達した時点により、次のように類型化できる（第1表）。①早くも1985年にピークに達した藤山台、②1990年の岩成台と石尾台、③1995年の高森台と中央台、④2000年の高座台、⑤2005年現在まだ増加中の押沢台、である。傾向としては、少数の戸建住宅ではなく、集合住宅の建築の古い町ほど人口減少に転じた時期が早い。押沢台には集合住宅がなかったが、現在は10棟ほどの民間アパートが点在している。

第1表 高蔵寺ニュータウンの人口推移

町 丁	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2005年 a	2008年 a
藤山台	13,429	13,660	13,244	12,429	11,198	11,061	11,429	11,097
岩成台	7,944	9,557	9,911	9,538	8,933	8,768	9,083	9,114
高座台	1,451	1,911	2,104	3,030	3,137	3,053	3,147	3,220
高森台	10,266	11,222	10,812	11,503	10,630	9,896	10,241	10,153
中央台	3,798	4,424	4,851	5,507	5,308	5,069	5,233	5,187
石尾台	2,812	5,585	5,663	5,396	5,216	4,895	5,141	4,981
押沢台	1,210	3,222	3,760	3,909	3,931	4,169	4,346	4,291
合計	40,910	49,581	50,345	51,312	48,353	46,911	48,620	48,043
藤山台 1	2,131	2,058	1,869	1,621	1,376	1,308	1,337	1,321
2	770	707	901	834	777	1,140	1,159	1,192
3	4,943	4,847	4,465	4,091	3,513	3,230	3,341	3,195
4	3,045	3,186	2,851	2,645	2,167	2,137	2,220	2,065
5	330	421	462	469	451	399	419	412
6	329	270	242	241	256	256	267	253
7	172	284	429	452	517	555	573	557
8	578	646	680	703	726	726	750	729
9	407	470	492	520	554	524	540	555
10	724	771	853	853	861	786	823	818
岩成台 1	343	359	402	405	429	468	478	460
2	320	398	485	516	516	552	585	600
3	65	108	173	196	306	327	332	350
4	368	440	509	504	525	510	532	529
5	331	394	460	493	492	483	506	511
6	3,814	3,683	3,460	3,188	2,801	2,474	2,557	2,569
7	398	442	460	498	523	506	515	502
8	1,261	2,574	2,735	2,503	2,113	2,078	2,161	2,126
9	652	661	636	631	641	651	675	723
10	392	498	591	604	587	719	742	744
高座台 1	61	183	293	434	431	372	393	517
2	1,187	1,424	1,408	1,299	1,193	1,091	1,094	1,073
3	81	117	144	149	182	242	256	281
4	122	187	259	278	266	262	277	274
5	-	-	-	870	1,065	1,086	1,127	1,075
高森台 1	1,251	1,219	1,091	1,160	1,074	1,023	1,069	1,044
2	448	495	527	546	554	543	564	559
3	784	833	835	916	846	731	728	800
4	188	209	228	935	930	894	910	881
5	37	93	99	107	91	85	94	91
6	760	1,042	1,115	1,183	1,179	1,193	1,249	1,244
7	2,007	2,112	2,083	2,107	1,954	1,782	1,863	1,900
8	1,376	1,330	1,102	1,049	930	760	791	712
9	1,646	1,962	1,953	1,853	1,610	1,407	1,472	1,506
10	1,769	1,949	1,779	1,647	1,462	1,478	1,501	1,416
中央台 1	-	119	351	353	339	338	349	329
2	381	719	691	681	623	633	649	684
3	765	778	833	753	678	589	593	632
4	1,177	1,165	1,044	941	879	812	819	795
5	296	342	394	400	397	398	419	400
6	725	786	732	671	697	683	705	682
7	409	469	550	535	589	578	601	598
8	45	165	260	1,173	1,106	1,038	1,098	1,067
石尾台 1	552	1,940	1,802	1,619	1,470	1,329	1,415	1,364
2	977	1,018	1,064	961	869	817	840	799
3	357	493	527	566	640	639	668	658
4	70	529	601	545	494	460	488	461
5	507	611	646	625	629	586	629	623
6	349	994	1,023	1,080	1,114	1,064	1,101	1,076
押沢台 1	362	732	714	677	607	591	617	630
2	55	209	273	275	254	240	255	241
3	56	369	652	719	705	754	785	735
4	58	347	448	512	535	560	600	588
5	234	419	486	567	691	774	792	820
6	185	514	564	523	516	507	518	492
7	260	632	623	645	623	743	779	785

(注) 国勢調査結果（春日井市集計）による。但し、aは住民基本台帳人口による。

直近の2005年をピーク時と比べた人口減少率をみたい。近年減少に転じた高座台は2.7%に留まるが、石尾台は8.0%となる。他の4地区はいずれも10%を超える。「高蔵寺ニュータウン発祥の地」といわれ、もっとも早くピークに達した藤山台が19.0%という最大の減少を示す。

次に、同一期間・最近10年間（1995—2005年）の人口増加率を周辺の町と比較してみたい（第2表、第2、3図）。ニュータウンで増加した町は2つのみ、それも高座台は0.8%に留まる。押沢台の6.7%を超える増加を示した町は、周辺25町のうち13町（玉野台を含む）となる。特に、気噴町は125.2%、次いで不二町が93.4%、東神明町も80.7%となり、30%以上が8町におよぶ。玉野町のほぼ中央部に新設された玉野台は、市内で最も新しい町である。1995年は人口ゼロであったが、5年後664人となり、2005年には1,429人を数えた。3丁目がその46.3%を占める。

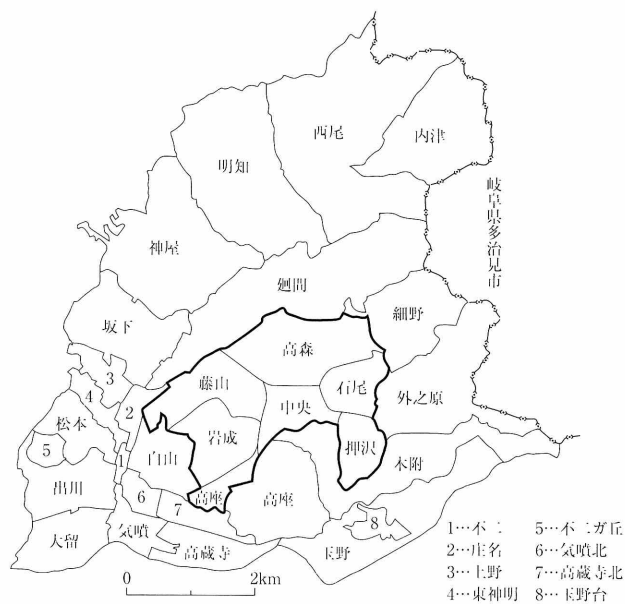
第2表 高蔵寺ニュータウンと周辺地域の人口状況

町 名	人口増加率	少子高齢化	国調人口	登録人口		人口乖離
	(1995-2005年)	(2005年)	(2005年)	(2005年)	(2008年)	(2005年)
藤山台	-11.0	100	11,061	11,429	11,097	103
岩成台	-8.1	115	8,768	9,083	9,114	104
高座台	0.8	60	3,053	3,147	3,220	103
高森台	-14.0	101	9,896	10,241	10,153	103
中央台	-8.0	118	5,069	5,233	5,187	103
石尾台	-9.3	219	4,895	5,141	4,981	105
押沢台	6.7	135	4,169	4,346	4,291	104
東神明	80.7	41	1,104	1,058	1,120	96
庄名	39.6	205	296	280	278	95
白山	18.6	84	5,861	5,798	6,018	99
松本	10.8	130	1,021	902	894	88
出川	41.5	43	5,864	5,682	5,701	97
大留	36.0	65	4,381	4,386	5,095	100
気噴	125.2	48	2,000	1,951	2,692	98
高蔵寺	3.3	134	3,738	3,642	3,895	97
高蔵寺北	28.9	80	2,413	2,339	3,978	97
高座	-11.1	414	344	379	479	110
玉野台		10	1,429	1,454	1,860	102
玉野	-13.9	282	1,187	1,234	1,171	104
木附	-0.2	129	524	541	539	103
外之原	-4.4	164	476	491	462	103
細野	56.7	604	268	179	187	67
不二ガ丘	-8.6	151	2,292	2,001	1,987	87
気噴北	10.0	168	1,524	1,564	1,552	103
不二	93.4	26	706	718	713	102
内津	-23.8	233	147	152	136	103
西尾	4.3	82	917	944	899	103
明知	7.1	561	1,419	999	949	70
神屋	-6.1	196	7,012	6,748	6,610	96
坂下	5.6	163	6,527	6,611	6,565	101
廻間	6.0	499	1,321	1,154	1,183	87
上野	33.6	61	858	864	933	101

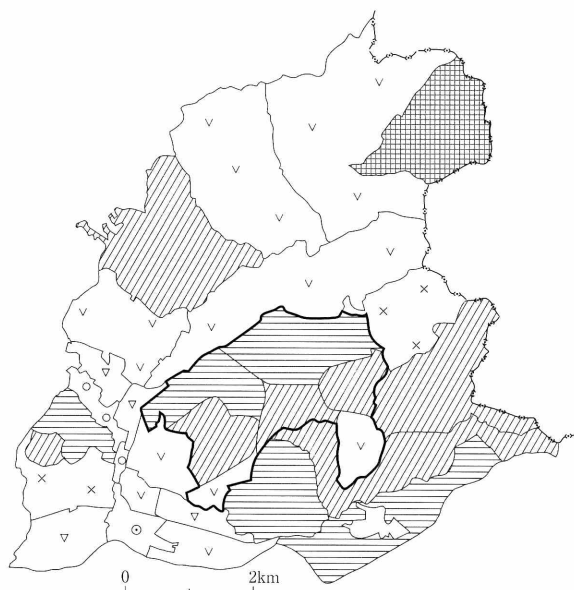
(注) 1. 第1表と同じ資料により作成。

2. 少子高齢化は年少人口を100とした老年人口の指数である。

3. 人口乖離は国調人口を100とした登録人口を示す。



第2図 高蔵寺ニュータウンと周辺の町



(注) 1. 凡例は第4図と同じ。
2. 国勢調査結果により作成(第8図まで同じ)。

第3図 町別人口増加率(1995-2005年)

10年間に人口が減少した町の数、周辺地域が8、比率にして32.0%である。これに対し、ニュータウンは数は5であるが、71.4%という高さを示す。その他の地域は不明の2町を除き45で、42.1%となる。春日井市全体としてみると、139町（1995年人口ゼロの2町を除く）のうち58で、41.7%に留まる。ニュータウン内の人口減少地域の広がりが目立つが、減少率の程度ではほかにもっと大きなところがある。

周辺25町で最大の減少率を示したのは市の北東端に位置する内津町（23.8%）、次いで玉野町（13.9%）、高座町（11.1%）となる。市内他地域では松新町と味美上ノ町が20%台を示した。愛知町は35.1%とさらに高く、最大は金ヶ口町の41.6%であった。ニュータウンで20%を超えた町はなく、最大の高森台でも14.0%であり、次いで藤山台の11.0%となる。

次に、別の地域スケールでもっと詳しくみてみよう。藤山台、岩成台、高森台の3町は10丁目まであり、最も少ないのは高座台（5丁目まで）である。合計すると56に達する。第3表はそれらの人口増加率の差異とその変化をまとめたものである。1985—95年の場合は55丁目（1985年人口ゼロの高座台5丁目を除く）のうち、20%未満の増加が20を数えた。同時に、21.1%減の藤山台1丁目から610.9%増の中央台8丁目まで、実に大きな差が見られた。町内の差が小さかったのは石尾台といえる。1丁目は16.5%減少したが、最も増加率の高い3丁目でも14.8%増に留まる。

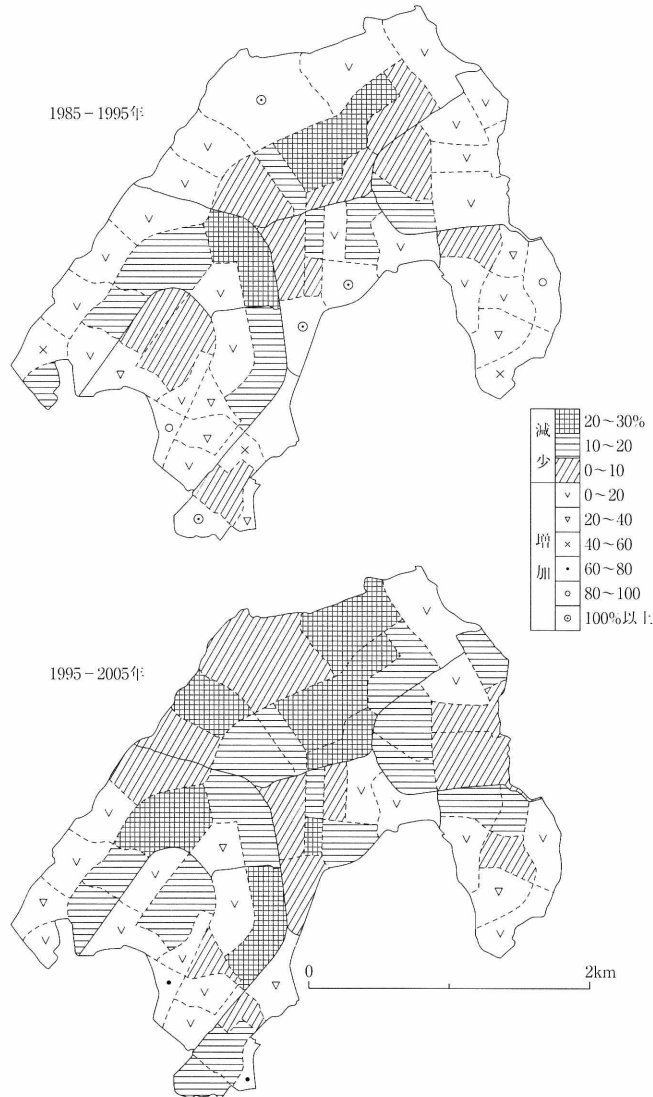
第3表 ニュータウンの人口増減率別丁数の変化

地 区	減少 (%)			増加 (%)					
	20 - 30	10 - 20	0 - 10	0 - 20	20 - 40	40 - 60	60 - 80	80 - 100	100以上
藤山台	1	3		5		1			
	1	3	1	3	2				
岩成台		1	2	3	3			1	
	1	1	1	6			1		
高座台			1		1	1			1
		2	1		1		1		
高森台	1	1	3	4					1
	4	3	2	1					
中央台		2	2	2					2
	1	2	3	2					
石尾台		1	1	4					
		3	2	1					
押沢台			1	2	2	1		1	
		2	1	3	1				
計	2	8	10	20	6	3		2	4
	7	16	11	16	4		2		

(注) 1. 上段は1985—1995年、下段は1995—2005年。

2. 国勢調査結果により作成。

1995—2005年になると、全体的に増加率が低くなる。80%以上増加した丁の数は0となり、40%以上に拡大しても9から2（ともに60%台を示した岩成台3丁目と高座台3丁目）に激減した。人口が減少したところも20から34に増え、特に20%以上減少した丁数は3.5倍となった。町内地域差が特に大きかったのは岩成台で、6丁目の22.4%減から3丁目の66.8%増までわたっている。逆に小さいのはやはり石尾台で、1丁目の17.9%減から3丁目の12.9%増へと小幅である。増加した丁の比率が高いのは岩成台で70%、低いのは高森台で10%となる。



第4図 高蔵寺ニュータウンの丁別人口増加率

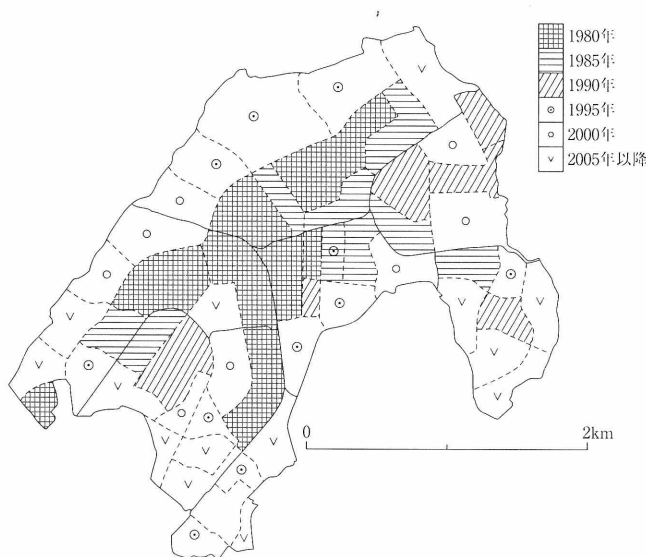
1995—2005年の増加率が10年前のそれを上回った丁は全体の20%に留まる。石尾台を除いて存在するが、特に集中する町はない。合計11丁の内訳は①減少率が低下したところ（藤山台1

丁目など3丁目), ②減少から増加に転じたところ(岩成台9丁目など3丁目), ③増加率が上昇したところ(高座台3丁目など5丁目), となる。

第1表に基づいて人口増加率の地域差を地図化したのが第4図である。1985—95年にはニュータウンの中央部と周辺部の差が明白であったが, 人口減少地域が周辺部に拡大した。特に高森台に顕著であり, 347.4%増から4.4%減へ大きく変化した4丁目のような例もある。5丁目も15.1%増から20.6%減へと逆転し, 中央台の1丁目と8丁目, 高座台1丁目の変化も大きい。

増加を維持したところは位置的に南部に多い。要因としては駅およびバスの便, 開発の時期, 住宅形態などが考えられる。同じ押沢台にあり, 1985—95年には30%台の増加を示したが, 2丁目はその後10年間に12.7%減となり, 5丁目は36.5%と若干増加率を高めた。

第5図は, 1980年以降の人口ピークの時期を示したものである。やはり中央部が早く藤山台や高森台でも廻間町に面した北側では遅い。開発時期の遅い押沢台はともかくとして, 白山町に隣接する岩成台の西側の丁目もピークは2005年以降である。



第5図 丁目別人口ピークの年

5. 人口の分布

このような地域差を反映して人口の分布も変化した。春日井市におけるニュータウン人口のシェアは, 入居2年後の1970年には6.1%であった。5年後には13.9%に上昇, 1980年には16.8%となった。1985年に19.3%とピークに達した。10年後には18.5%となり, 2005年には15.9%に低下した。

ニュータウン内に目を転じ, 町別比較が可能な1980年以降についてみてみよう。1980年の場合藤山台がニュータウン全体の32.8%を占め, 次いで高森台25.1%, 岩成台19.4%となり, これ

ら3町で全体の77.3%を占めていた。これらの比率はその後低下し、2005年にはそれぞれ23.6%、21.1%、18.7%となった。岩成台のシェアは0.7ポイント、高森台も4.0ポイントに留まったが、藤山台は9.2ポイントの低下となった。残る4町では25年間でシェアが拡大したが、目立つのは押沢台の5.9ポイント増であり、次いで石尾台の3.5ポイント、高座台の3.0ポイントとなる。

丁別で見た場合、1980年の人口が最も多かったのは藤山台3丁目の4,943人、次いで岩成台6丁目の3,814人、藤山台4丁目の3,045人となる（第1表）。この順位は2005年でも変わらないが、人口は25年間で、それぞれ34.7%、35.1%、29.8%の減少となる。ニュータウン人口に占めるこれらのシェアは、28.8%から16.7%に低下した。

第1表によると、ほかに9つの丁で人口が1千人を超えているが、集合住宅がすべてか、主のところである（高森台1丁目のみすべて戸建住宅）。2005年の時点ではこのうち2丁が1千人を割り、新たに5丁が加わる。特に高座台5丁目は1990年まで人口ゼロであったが、現在は戸建住宅と集合住宅（7～8階建、4棟）が並んでいる。

人口が100人に満たないところは1980年では高座台1丁目と3丁目、高森台5丁目、中央台8丁目、石尾台4丁目、そして押沢台の2～4丁目であった。2005年になると、高森台5丁目のみとなる。ここの土地の大部分は誘致施設地区として造成された。西半分には数社の進出がみられるが、東は未利用の県有地となっている。住宅のある地区はニュータウンの北端に位置する狭い範囲で、すべて戸建住宅である。1980年の37人から1995年には107人となったが、これをピークに減少し、2005年は85人となっている。対照的に、他の丁はかなりの人口増となり、特に中央台8丁目は集合住宅が加わったため、25年間に45人から1,038人に増加した。土地の過半は一般住宅地であるが、西側には集合住宅（5～6階建、10棟）が並ぶ。

なお、人口密度も基本的な人口状況の一つであるが、春日井市役所では丁はもちろん町別の面積も把握していない。

6. 少子高齢化

ここで、もう一つの重要な人口現象である少子高齢化の状況を見ることにしたい。1985年6.5%であった春日井市の高齢化率は1995年に9.9%となり、以後も2000年12.7%、2005年16.2%と上昇した。本稿では高齢化率ではなく、年少人口（15歳未満）と老年人口（65歳以上）との差異に注目したい。両者の比率（年少・老年人口比率）を便宜的に「少子高齢化指数」と呼び、年少人口を100とした場合の老年人口の指数をみることにする。2000年の場合、春日井市全体としては84で、年少人口が多かった。5年後には両者の数は逆転し、107となった。

市全体を町別に見ると、2000年の場合、この指数が100を上まわる、すなわち、年少人口より老年人口が多いところは141町のうち66（同数を含む）を数えたが、まだ46.8%で半数に満たなかった。それが僅か5年後には92に達し、65.2%に上昇した。周辺地域ではその数は、14から15へ1町増えただけである。ニュータウンは2から6に増えた。人口減少率の高さと少子高齢

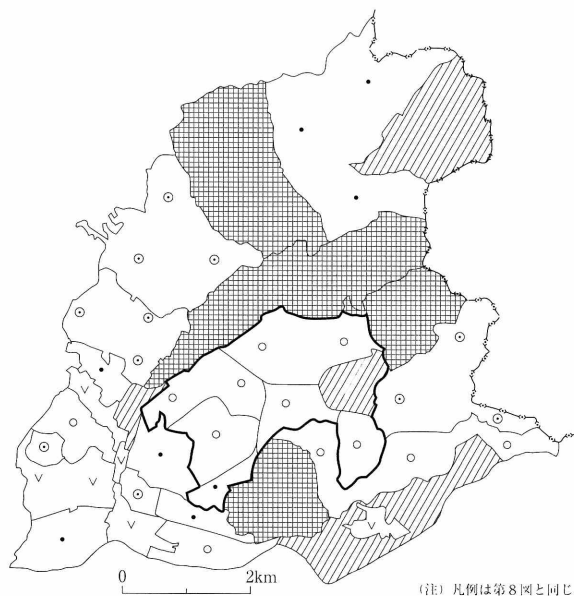
化指数の高さが対応している。2005年の場合、高座台が60と低く、残り6町は100を超える。一番高いのは石尾台の219であり、年少人口の2倍以上の老年人口が存在する。しかし、他地域と比べると、それほど大きい差とは言えない。

少子高齢化の中にあっても、この指数が50を下回る町、すなわち、老年人口が年少人口の半数以下の町も12存在する（第4表）。最も小さいのは老年人口ゼロの愛知町と僅か0.3%の王子町である。ともに大企業の工場と施設によって土地の大半が占められ、住宅はすべて社宅である。これらを除けば、玉野台の10と不二町の26となる。この2町を含む5町が周辺地域にある（第6図）。そこでは指数が100を超える町も15を数え、特に高いのは細野町（604）と明知町（561）である。年少人口の約6倍の老年人口がいることになる。この2町に次ぐのは廻間町（499）であり、高座町と桜佐町も414と高い。5町のうち4町が周辺地域にあり、この指数の対照性が目立つ。

第4表 春日井市における少子高齢化指数別町の数（2005年）

	50未満	50～100	100～150	150～200	200～250	250～300	300以上
春日井市	12	37	43	24	15	1	9
うち周辺	5	5	3	5	2	1	4
うち NT		1	5		1		

（注） 国勢調査結果により作成。

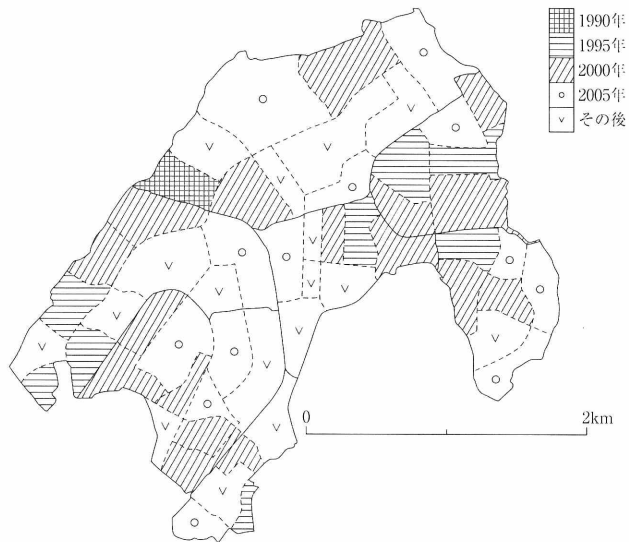


（注） 凡例は第8図と同じ。

第6図 町別少子高齢化指数（2005年）

ニュータウンの丁別の状況についてはもっと長期的にみてみよう。少子高齢化指数が100を超えた、すなわち老年人口が年少人口を上回った丁は、1990年までは高森台2丁目のみであった。1995年になると、藤山台の5, 6, 8丁目、比較的開発の遅い石尾台でも2, 5丁目などでみられるようになる。しかし、この時点ではまだ、全体の14.5%にあたる8丁のみである。5年後、その2倍の数に加わり、2005年にはさらに13丁増えることになる。しかし、同時に、この時点でもまだ年少人口のほうが多い丁も17を数え、石尾台を除いて存在する。

この状況を地図に示したのが第7図である。先にみた人口ピーク時点（第5図）ほどの地域的規則性はなく、それとの関係も薄い。ニュータウンの縁辺地域が早いといえそうであるが、まだその状況にないところも広く点在する。集合住宅の多い地域が遅いという傾向はみられる。

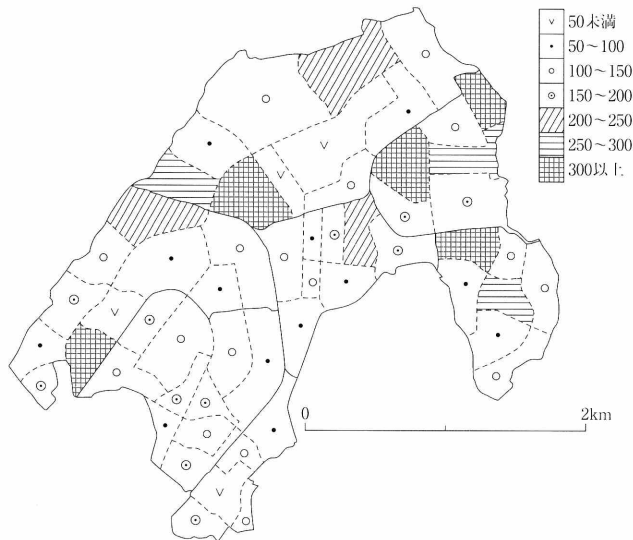


第7図 老年人口が年少人口を超えた年

第8図によれば、2005年の少子高齢化指数が50に満たないような、年少人口が老年人口の2倍以上のところは4丁ある。11階建賃貸住宅など5棟（439戸）が立地する高座台2丁目が31で最も低い。逆に、老年人口が2倍以上の丁は11を数え、特に石尾台では半数の丁でみられる。指数の最も高いのは石尾台2丁目で514、次いで藤山台5丁目の454、押沢台1丁目の429となる。これらの分布は点在しており、規則性はあまり見られない。

次に、二つの丁を例にして少子高齢化の進行状況をみてみよう。一つは岩成台9丁目（以下岩成）、もう一つは高森台5丁目（高森）である。前者はバス通りを隔てニュータウン発祥の地（藤山台3, 4丁目の集合住宅群）、東は小、中学校と隣接している。後者は上記のようにニュータウンの北端に位置する。共に戸建住宅のみで集合住宅はない。

コーホート分析は、通常、男女別人口を5歳毎の年齢階級でみることになる。ここでは10歳



第8図 丁別少子高齢化指数 (2005年)

毎にし、1歳刻みで補足する。第5表により、いくつかの注目すべき点を列挙したい。①1980年の岩成の男子は10歳未満が最も多く、10年後はそのまま10代に移行するが、更に10年後は50代が多い、②1980年の女子は30代が多く、その後は年の経過とともにそのまま移行する、③男子の場合、1980年に10歳未満であった人々(78人)は、10年後も70人とあまり変わらないが、20代になると激減する、④この点の女子の変化は大きくない、などである。人口規模がかなり違うが、高森でも同様な傾向がみられる。20~50歳の親が子供とともに入居し、子供は高校卒業後ニュートウンを離れるということになる。

この点をもっと明確にするためには、年齢を1歳毎にみることである。図表にはしていないが、次のような点を指摘できる。①1980年の岩成の男子で最も多かった年齢は9歳で、15人を数えたが、10年後は2人しか残っていない、②女子も10人から6人に減少した、③同年の高森の男子は16~30歳、女子は12~23歳がゼロであり、30代と年少者が主であった、④特に岩成に顕著であるが、高校卒業年齢時の19歳が大きく減少、⑤岩成の男子の場合、0歳児は減少し、1980年に5人しかいなかった70歳以上が1990年12人、2005年53人と急増した、⑥女子の年少人口の減少は男子ほどではないが、70歳以上はやはり急増した、⑦高森は人口そのものが少ないこともあるが、すでに1980年当時5歳未満は男女とも少なく、老年人口の増加は着実に進んだ、などである。

少子化は学校生徒数にも当然大きな影響を与えた。ニュートウンにある小学校(以下、小とする)は10を数える。通学区域が町の範囲と一致するのは中央台小と押沢台小の2校のみである。石尾台4丁目や細野町の児童は東高森台小、白山町の一部は西藤山台小や岩成台小に含ま

第5表 ニュータウンの2つの丁の男女別年齢別人口推移（人）

	年齢 (歳)	1980年		1990年		2000年		2005年	
		男	女	男	女	男	女	男	女
岩成台九丁目	0～9	78	46	29	23	20	28	25	29
	10～19	70	62	70	61	34	25	29	28
	20～29	20	30	28	38	47	47	33	35
	30～39	58	67	20	32	23	35	30	46
	40～49	64	62	68	71	31	34	29	34
	50～59	30	27	54	60	70	77	44	54
	60～69	13	9	28	26	50	57	61	76
	70～79	3	9	9	12	24	24	45	28
	80～95	2	2	3	4	7	8	8	16
	年齢不詳							1	
	計	338	314	309	327	306	335	305	346
高森台五丁目	0～9	7	5	6	5	2	5	1	3
	10～19	2	1	15	2	7	4	1	6
	20～29		3	3	4	8	4	7	7
	30～39	6	5	4	8	2	6	3	3
	40～49	3	1	10	10	4	8	1	6
	50～59	1	1	6	5	9	11	8	11
	60～69	1	1	5	6	6	7	8	7
	70～79			2	1	4	4	5	6
	80～95				2			1	
	計	20	17	51	48	42	49	36	49

(注) 国勢調査結果による。

れ、石尾台小は同町の4丁目を除き、外之原を加えている。このような事情により、町別人口と生徒数の推移を同様に比較することは厳密にはできない。しかし、大勢には影響ないので、少しみることとする。資料は毎年5月1日現在で公表される学校基本調査結果による。

ニュータウンで最も早い藤山台小は1968年5月20日に仮開校した。その2日前に入居が始まったばかりであり、当日の生徒は僅か24人であった。9月9日の正式開校時には179人に増えた。1970年5月1日には20クラス・764人となったが、その後学校新設により減少した。1971年開校の藤山台東小は756人で始まり、1979年にピークを迎えた。1972年開校の岩成台小も1980年がピークである。石尾台、東高森台、押沢台の3校はいずれも開校後3～5年でピークとなった。その時点が最も遅かった西藤山台と中央台の2校も1986年が最多である。近年一部の学校にやや増加傾向がみられるものの、ピーク時と比べるとかなりの減少となる。新設校による通学区域の変更のため、ピーク時と比較してもあまり意味がないので、最後の押沢台小が開校した1983年と2008年を比較してみる。40%台の減少に留まったのは岩成台と岩成台西の2校のみである。60%台の減少が3校で、石尾台小は78.5%に達した。後者の場合、1982年の1,324人は1979年の高森台小に次ぐ生徒数であるが、1991年に500人を割り、2003年には176人まで減少した。

7. 国調人口と住民登録人口の乖離

人口を国調でみるか、住民登録でみるかは時として大きな差異をもたらす。この点は、かつて拙稿でみたように、震災前後の神戸市人口の分布においては不可欠な視点（住宅の倒壊・焼失、仮設住宅などのため）であるが、そのような非常時でなくても考慮しなければならない。たとえば細野町の少子高齢化指数が市内最高であるのになぜ人口増加率も高いのか、という疑問が生じる。ニュータウンの7町の場合、国調人口を100とする登録人口は103～105に入っている（第2表）。地域差も乖離の程度もほとんどなく、この点では同質性が強い地域といえる。しかし、周辺地域に目を転じれば、注目すべき差が浮かび上がる。高座町は唯一110という高さを示し、登録人口の方が1割多い。それに次ぐのは玉野町の104であり、ニュータウンの各町と同程度である。これらを含む12町が100を超える。しかし、注目すべきはそれ以外の町である。

登録人口が国調人口の9割以下という町が5を数える。特に細野町の67と明知町の70が目立つ。前者はニュータウンの北東部に接し、東は岐阜県多治見市との境に429メートルの道樹山がある。ニュータウンとは対照的な農村景観を呈している。キャンプ場はともかくとして、初詣、蛸見物、登山、ウォーキング、植物園へのアプローチなど、ニュータウン住民にとって馴染み深いところである。人口は1980年の176人から減少してきたが、1995年には171人と僅かながら増加に転じた。しかも2000年には246人、5年後には268人と増加が続いた。

第6表は細野町の人口の特徴をよく示している。①男子の場合、1990年に12人しかいなかった60歳以上が、2005年には60人（全体の52.6%）を数え、特に80歳以上の変化が大きい、②60歳以上の女子はすでに31人（32.6%）となっていたが、15年後にはなんと101人（65.6%）に増加し、やはり80歳以上が激増した、③高齢者の増加が人口増加をもたらしている、④国調人口と

第6表 細野町の国調人口と登録人口（人）

年齢 (歳)	男			女		
	国調人口		登録人口	国調人口		登録人口
	1990年	2005年	2005年	1990年	2005年	2005年
0～9	7	6	6	11	4	4
10～19	6	14	13	12	10	11
20～29	12	4	5	16	8	7
30～39	8	8	8	7	12	12
40～49	8	11	12	15	10	11
50～59	16	11	12	3	9	9
60～69	6	23	15	12	24	13
70～79	5	20	8	13	26	10
80～89	1	15	5	5	40	13
90～99	—	2	1	1	10	4
100以上	—	—	—	—	1	—
計	69	114	85	95	154	94

（注）春日井市の資料により作成。

登録人口との乖離が、男女ともに60歳以上で大きい、などである。

1995—2005年に人口が増加した地域で少子高齢化指数が200を超える町はニュータウンには2町のうち1町あるが、周辺地域も17町のうち7町である。後者の場合、人口が50%以上増加した5町のうち4町までが50未満の指数となっている。例外が細野町である。指数はなんと最高の604を示す。細野町の高齢化は確かに早かった。外之原、玉野といった類似の町と比べても、年少人口と老年人口の逆転は数年早い。1995年にはそれぞれ32人、37人と大差なかったが、5年後には一挙に27人、121人となる。これらの主な理由は介護老人保健施設（入所定員100人）の開設に求められる。1997年、民間のテニスコートの東半分に建築されたものであるが、細野町といっても、むしろ高森台6丁目の北に隣接している。上で同町の国調人口と登録人口の大きな乖離などを指摘したが、それはこの事情による。なお、明知町や廻間町の少子高齢化指数の高さや人口乖離の大きさも、主に福祉施設の有無によって増幅されている。

8. 近年の人口の動き

国調人口は直近でも2005年のものであり、その後の人口推移は毎月公表される登録人口をみなければならない。国調と同時点の10月1日現在の人口を2005年と2008年の比較でみたい。

まず周辺地域をみる（第2表）。25町のうち13町で減少をみており、最大は内津町の10.5%である。逆に依然として増加率が高いところも目立つ。高蔵寺町北は70.1%に達し、気噴町の38.0%、新しい町・玉野台もそれに次ぐ。これに対し、ニュータウンは減少が続いている。2000—05年国調人口が減少した岩成台と高座台のみが増加しているが、小幅に留まる。2005年まで増加が続いた押沢台も減少に転じた。

ニュータウンで人口が増加した丁は56のうち18である（第1表）。2000—05年が17であったので、ほとんど変わらない。増加に転じた丁は8を数えるが、そのうち3丁（3, 7, 9丁目）が高森台にあり、石尾台には存在しない。増加した丁の比率が高いのは岩成台で、10丁中6丁となる。高座台は5丁中2丁のみであるが、1丁目が124人増えた。このため町としては2.3%となり、ニュータウンの中では大きな増加となっている。

9. おわりに

以上、人口推移と少子高齢化を中心にニュータウンの特徴やその中の地域差をみてきた。両者ともあまり取り上げられてこなかった点であるが、研究上のみならず、人口の実態を知るうえでも必要である。本稿は、住民の知りたい人口状況にある程度答えているし、市役所などの調査結果報告に一考を求めることにもなる。但し、動向や地域差の要因に関する点は十分とはいえない。さらなる実地調査を踏まえた分析が課題といえるが、今後の人口動向にも注目したい。

（2008年12月30日記）

参考文献

1. 石川義孝編著『人口減少と地域－地理学的アプローチ』京都大学学術出版会, 2007年9月, 347ページ。
2. 松原 宏「少子高齢化時代の地域再編」『経済地理学年報』第52巻第4号(2006年12月), 1～17ページ。
3. 宮澤 仁「過渡期にある大都市圏の郊外ニュータウン－多摩ニュータウンを事例に－」同上, 18～32ページ。
4. 大会実行委員会「大会シンポジウム・少子高齢化時代の地域再編と課題」同上, 79～88ページ。
5. 谷 謙二「大都市圏郊外住民の居住経歴に関する分析－高蔵寺ニュータウン戸建住宅居住者の事例－」『地理学評論』第70巻第5号(1997年5月), 263～286ページ。
6. 稲垣 稜「大都市圏郊外のニュータウン出身者の移動行動－高蔵寺ニュータウンを事例に－」『地理学評論』第76巻第8号(2003年7月), 575～598ページ。
7. 高蔵寺ニュータウン開発事業に係る事業記録編集委員会『高蔵寺ニュータウン－20年の記録－』日本住宅公団中部支社, 1981年8月, 361ページ。
8. 津端修一「高蔵寺ニュータウンの30年－計画がめざしたもの－」『topika winter 1998』1998年12月, 4～10ページ。
9. 『ふるさと高蔵寺の光と影－30歳のニュータウン－』中日新聞PR版, 84ページ。
10. 『高蔵寺ニュータウンのこれからを考えるアンケート調査報告』春日井市企画調整部企画課, 中部大学建築学科豊田研究室, 2008年3月, 97ページ。
11. 高山英華『高蔵寺ニュータウン計画』鹿島出版会, 1967年9月, 255ページ。
12. 高蔵寺ニュータウン30周年実行委員会『高蔵寺ニュータウン 30年記念誌』1999年5月, 55ページ。
13. 小池秀夫「震災後の神戸市の人口動向の地域差(1)(2)」『地域分析』第37巻第1号(1999年1月)1～15ページ, 第38巻第1号(1999年12月)1～19ページ。